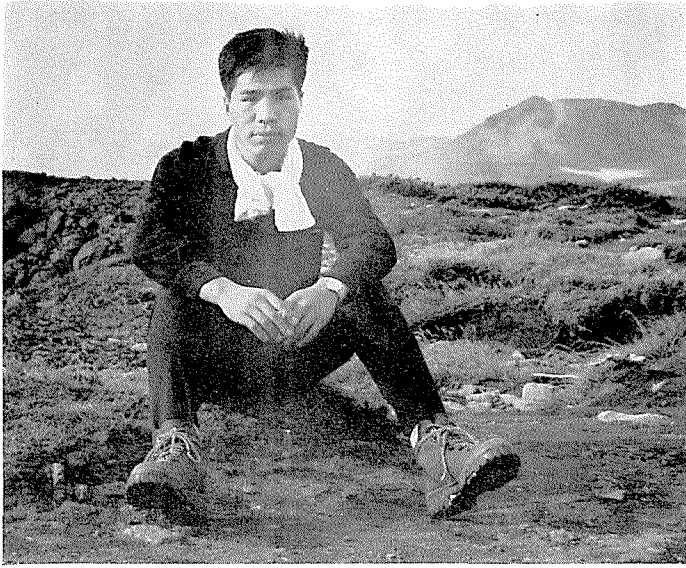




Title	田沼邦雄助教授の死をいたむ
Author(s)	木下, 誠一
Citation	低温科学. 物理篇, 30
Issue Date	1973-03-05
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/18215">http://hdl.handle.net/2115/18215</a>
Type	other
Note	田沼邦雄の肖像有
File Information	030.pdf



[Instructions for use](#)



田沼邦雄助教授

昭和17年—昭和47年

1942—1972

## 田沼邦雄助教授の死をいたむ

昭和 47 年 10 月 4 日朝、田沼邦雄助教授を含む一行 4 名は、大雪山系高根ヶ原における構造土を調査するため、白雲石室を出発して忠別小屋に向った。しかし、天候すぐれず、正午頃からみぞれまじりの強風におそわれ、一行 4 名の前進は難航した。特に、田沼邦雄助教授の疲労はげしく、僚友の懸命な助けも空しく、遂に午後 3 時 30 分永遠の眠りについた。享年僅か 30 歳、前途有為な青年、将来の低温科学をになうべき若き学徒が、このような非業な最後を遂げるとは、誠に痛恨の極みであります。

田沼邦雄助教授は、昭和 41 年東京理科大学を卒業と同時に、低温科学研究所凍上学部門の助手となり、以来 6 年半の間研究に従事して来た。その間に 17 篇の論文を発表するという精力的な活動であった。特に凍上の際の土中水分の移動については、一貫した計画をもって研究を進めて来た。昨年来、 $\gamma$ 線透過率計を応用して、現実に凍上現象を起しつつある土中の水分の挙動を微細に測定出来る装置を考案していたのであるが、やっと最近完成し、一貫した計画の最終の詰めに入ろうとしたところであった。田沼邦雄助教授は、器械に明るく、この装置も彼の創意による所が大きく、まさに画期的とも言えるもので、誠に残念な次第です。

凍上学部門としての観測研究に当っては、北見に、紋別に、苫小牧に、或は道内各地の野外現場に、常に重要な一員として活躍をして来ました。また、その他にも、所内の各研究グループにも参加し、道路上の雪氷の調査、大雪山硬化雪の調査、オリンピックの雪の調査等において、重要な協力者としての責を果たしました。特に、昭和 47 年 3 月には、遠く北氷洋の氷島における海氷観測に田畑教授の協力者として、また 6 月から 8 月にかけては、アラスカの氷河調査に若浜教授の協力者として、二度にわたる海外調査に出張し、立派にその責を果たして来たのです。

また、このたびの遭難になった大雪山系の越年凍土と構造土の調査に当っては、早くから自分で計画を練り上げ、東京大学理学部地理教室、北海道大学理学部地球物理学科陸水教室に呼びかけ、それぞれの専門の視野からの合同調査という総合研究を実施したわけです。この計画は、田沼邦雄助教授の熱意のもとで作られたものでした。そして、亡くなる前日の 10 月 3 日には、小泉岳付近において越年凍土に関する重要な観測結果を得ることが出来、いよいよ 4 日には、この計画の最終段階の構造土調査に入ったわけです。田沼邦雄助教授としては、まさに死んでも死に切れないぐらいの残念さであったと思います。

しかし、田沼邦雄助教授の研究活動、また考案した器械や計画は、必ず同学の士によってうけつがれていくことでしょう。

昭和 47 年 10 月 25 日

木 下 誠 一